

結婚生活における男性の家事・育児参加の決定要因

1250493 野村桃花

指導教員 小谷浩示

研究背景

男女雇用機会均等法の施行や女性の高学歴化により女性の社会進出が進展している一方で、家庭内の性別役割分業意識は依然として根強く、家事や育児の負担が女性に偏る現状が続いている。

研究目的

本研究は、「男性が家事・育児に取り組むのはどのような要因からなのか」をリサーチクエスションとして設定し、「Inquisitiveness が高く、妻への愛情が深く、家事・育児の分担に関する会話を行なっていると家事・育児に取り組む」という仮説の検証を目的とした。

研究方法

日本国内の子持ち夫婦 218 組を対象にアンケート調査を実施し、ポアソン分析を用いて家事・育児の週平均回数と関連要因を分析した。

分析結果

収入が高い方が家事・育児を行うという相対資源説を支持する結果や家事・育児に関する会話をする夫婦は、夫の家事・育児の頻度が増えるという結果が出た。Inquisitiveness や愛情尺度は男性の家事・育児参加に統計的に有意な影響を示さなかったが、愛情尺度において妻の愛情が増加すると妻自身の家事・育児の負担が増加するという結果が得られた。加えて、家族構成や愛情尺度において夫と妻の結果に非対称性が見られ、それが性役割別態度などの社会規範や固定概念からによるものであると解釈される。

考察・結論

既存の価値観に囚われず結婚における夫と妻の役割を更新して行く事、稼ぎ手ともなり、且つ、家事育児で忙しい妻を理解する為にも夫婦間の対話を日常化する事が夫婦の公平な役割分担の鍵である、と考えられる。